

当世仏教談義 Ⅱ (94・10・16)

片岡 義道 (昭15・文乙)

失礼をいたしましたして暫くお話をさせていただきます。ご紹介いただきましたように、前回もそうございましたが、同窓会という、皆さんも私も何と申しますか、あんまり気を使うこともないという会合でございまして、従いまして、私の方も大いにぎつくばらんに、碎けたお話にさせていたただきたいと思えます。

私は、前回も申し上げましたが、専門は仏教学ではございませんで、まあ関係はございませけれど、仏教音楽でございまして、最近声明というのが少しブームと言いますか、皆さん方の注目を惹く様に成って参りました。今朝の新聞でしたか、昨日の夕刊でしたか、国立劇場で天台宗のお坊さん達が「薬師曼荼羅供」というのをやられたということが、大きく載っております。皆さん方のなかにも恐らくお読みになった方がいらっしやると存じます。今迄ですと、声明って何だと、そんなものがあるのかというような感じだったのが、多少とも皆さんの興味を持って見

ていただく、聞いていただく世の中になって来たように思います。それが私の本来の専門でござります。ところが、私は田舎の、あまり大きくもない天台真盛宗と申しますが、その宗団の寺の住職をやっております。

所謂仏教の既成宗団のひとつの、一末寺の住職をやって今年で約五十年になります。現場で働いている人間として今日に至っておりますので、その間いろんな経験と申しましょか、体験をいたしましていろいろと感ずるところがございました。ところで昭和二十七年に京都市立音楽短期大学というのが出来ました。その音楽の理論の助教授として呼ばれまして、それ以来ずっと定年退職いたします迄その大学で音楽学の講義をしております。

退職してから今でもう十年になりますが、その間ずっと所謂二足のわらじをはいていたわけでございます。初めは学校の方が、寺の収入よりずっといい給料をくれますので、これはそちらを主力にやらねばいかんと思ひまして、寺の方は片手間という程に申しわけなくやっておったんですが、だんだんと年を取りまして、これで良いのかと思うようになりました。こんなことをしていたら今に仏罰が当るぞと思ひ出したのです。その額はともかくも、お布施と称してお金をもらいながら住職の真似事ややっていて良いのか、特に気になったのは、お前はいつたい仏教学の素養があるのか、偉そうに坊主だというような顔をして、人様の前で時には話をしなければなりません。仏教についてこんな不勉強でありながら一人前の住職面をして恥かしく無いの

かという思いがだんだん募ってまいりまして、これではならじ、とにかく時間があります限り自分で仏教学も勉強しないといけないという気持が強くなりまして、折に触れてそちらの勉強も少しづつやりまして、今に至ったわけでございます。

先程からいらっしやいましたけれど、長尾先生がお見えになっていました。私は昔から先生にはいろいろお教えただいておるのでございますけれど、こんな仏教学の現役最長老の大御所がお見えなので、大変背筋が寒くなつて参りまして、これはえらいことだ、とても長尾先生に聞いて頂けるような話など出来そうにないと思つておるんですが、まあとにかく私の考えていることを申し上げるより仕方がないと、こういうふうに覚悟を決めまして、お話させていただきます。

前回は追悼の意味もございましたので、私の専門の仏教音楽、声明の方に重きをおいてお話しせて頂いたのであります。その内容をもう一度振り返りますと、現在の既成宗団の極くわずかな特殊な例を除きましては、一般的に現場で行われている声明というものは、いかにも貧弱というか、極めて低級なものになっていくことを申し上げました。あれではとうてい皆様からお布施と称してギヤラをいただく価値はないということを申し上げたいと思います。

声明というのは、簡単に言えばお経ですね。お経に節を付けて唱えるものを声明と申しますが、この声明の本当のあるべき姿はあんなものじゃないんだと、これを是非知っていただきたいと思つてお話しさせて頂いたことでした。それで最初に、この理想と現実との間にどんな落差がある

のか、声明のあるべき姿と現在やられているお経とは、どんなに違うのかという事は実感して頂かないことには、話だけではピンとこないであろうというので、ほんの五分程であります。「極樂声歌」の一部を実演して聞いて頂いたことでした。

ところで、今回私の話を初めて聞いて頂く方もいらっしゃると思いますので、同じ事を実感として理解して頂くために、私の寺が属している天台宗の声明のあるべき姿、これが本当の声明だということを五分程やらせて頂きます。

——「六種回向」 実演——

いかがでございましたか。皆さん方もしよつ中お経を聞いていらつしやるかと思うんですが、それとこれとの間の落差たるや誠に大なるものがあると私は思うのです。われわれ坊さん連中がちゃんと勉強して、ちゃんと唱えれば全てこういう調子になると思うのです。私はこの前も申しましたんですが、お坊さんというのは、お布施と称してギヤラをもらうからにはプロだと思つて、プロならば、それに対する道義的責任があるはずである。ところが、この事を一向に感じないで、お金だけはさっさともらう。これではダメで、このような意識を改革する必要があると申し上げたと思うんです。私この頃機会がある毎にいつているんですが、気に入った坊さんだけにお布施を渡す、つまり坊さんもプロの歌手と同じように考えて頂きたい。ダメなものダメ。プロ野球選手もそうですけど、成績の上らんものはダメ。これがプロ世界でしょう。ところがこれが無い

のがお坊さんのお経の世界ではなからうかと思えます。

さてこれから私の現場の体験に基づくお話を続けさせて頂きたいと思えます。既成宗団の末寺と檀家という現場に於きましては、多少意識のある坊さんならば、自覚のあるなしということが非常に気になる筈です。毎日自分のやっている事が当り前だ、これでよろしいんだと思ってやっ
ていらっしやるのが、何とも呑気というか、厚かましいというか申し上げる言葉も無い程ひどい
んです。早い話が日本人というのは元来が非常にずばらな一面があると思えます。大陸の方から
入って来ました仏教の經典というのを、殆んど翻訳しなかった。そのままをいうるだけです。
漢文に堪能な人は分かっておられると思うんですが、一般の民衆には、これではさっぱり何が何
だか分かりません。それを一通りやって、後でお念仏を上げて、ハイさいなら、ということとは、
どういうことなのでしょう。私は皆さん方に、特に皆さんのように、最高の教育を受けられた
各階層のエリートの方々に、お願いしたいことは、そういう機会には率先して「今唱えてもらっ
たお経はどういう事を意味しているのですか」と言っ
て質問して頂きたいのです。どうい
うこと
なんです
かと。それを平たく説明して下さい、そうでないと訳が分からんのですが、と聞いて頂
きたい。そうしないとお坊さんはあんまり勉強いたしません。これが聞かれるとなると、解説書
の一つもひっくり返して読んで来られると思えますがね。そうでないと、折角の法要の場がその
ままで何となく流れてしまっ
て、ハイさいならという、その慣れ合いが怖ろしい。それを私は先

ず改革せねばならない第一だと思ひます。是非、皆さんにそういうことにご協力をお願いしたいと私は思ひます。

それから次に、現在日本には仏教の宗派が沢山ございます。いちいち申すまでもなく、同じ宗派の中でも派というのがございまして、早い話が浄土真宗、この中にも西本願寺、あるいは東本願寺、仏光寺などの派があり、一身田には、高田派専修寺がありというふうに沢山の派に分かれています。そういう派が宗団を作つてやっていますわけですが、〇〇宗、〇〇派という看板を立てる、それにはよその宗派にない特殊性がなくてはならぬという事になります。ただその違い。私とこの専売特許はこれ、あそことはここが違うなどと言う。もう一つこれがエスカレートしますと、あそここの言っているこの事は違ふ。本当ではない。私とこのこの看板の下に言っていることが正しいのだなどということになつて参りました。所謂宗我と言いますね、宗の我、宗としてのエゴがだんだん前面に出て来ることになる。そうしてわが家の宗派の開祖はこの方、あの方、日蓮聖人、親鸞聖人、弘法大師、伝教大師、道元禪師などいろいろですが、その方々のおっしゃつたことがいちばん大切にされ、一生懸命追求され、勉強されます。

ところが、その原点、これがどうも等閑にされているのです。全ての宗派に仏教という名を冠する限り、原点は一つのはずです。仏教の開祖はお釈迦さんです。お釈迦さんが何をなされたか、何を説かれたか、お釈迦さんが悟られたのは一体何だったのが原点だと思ひます。これが現在

の既成宗団では、一般におろそかにされているのではないかと私は思うんです。

お釈迦さんの悟りとは何か。それは勿論いろんな仏教学の書物を読んでもそこには書かれています。ところが一般に仏事の現場に行きますとそういうことを実話の中に入れて説かれてはいない。これが仏教の原点なんです。そこから出てだんだんと変遷し、時代を経て現在の、我々の宗派の教えに至ったんですよというふうに分かり易く説いてもらわんと、いかんではないかと、私は思います。お釈迦さんが、お悟りなされたということは誰でも知っております。ところがその悟りの内容は何か、本当の悟りは何かということが、割に分かっているようで分かっていない。私は今までにかなり長いこと及ばずながら仏教の本も読みました。ですけどもなかなか納得がいかなかったのです。やっと最近になって、釈尊の悟りとはこれに違いないと私なりに思うようになりました。

それは「縁起」ということだと思えます。縁起でもない、縁起が悪いなどと申しますが、あれですな。現在残されている仏典といえますか、お釈迦様の伝記に関連して、一番古い物に属するというものの一つに、「マハー・ヴァツガ（ブツダの開教）」というのがあります。私はそれを信じて読まして頂いたんですが、そこには、お釈迦様が悟られたのは、「縁起」だと書いてあります。この「縁起」とは何かといえますと、中村元博士が、仏教語大辞典というのを書いておられますが、それを読みますと「全てのものもちつもたれつの関係においてのみ存在する」とい

と」と説明されております。全ての存在は、それ自体の本性というものが無いんだぞと、在るよ
うに見えているが、みんなあらゆる物と物との働きが、もちつもたれつの形になってその物の仮
の姿になる。だから何でもよろしいが、その物の本性は何だと突き詰めて考えますと「空にな
る」、つまりわれわれの感覚器官に対しては何も無いということになるそうです。

私共僧職が、一般の檀家の所でむずかしいことをいいますが、何にも分かりませんが、
一般檀信徒の中には、お年寄りが多いんです。仏様には南無阿弥陀仏といって手を合せて拝んだ
らそれでいいんだという、そういう考え方の傾向なんです、それを今言いました仏教の原点と
どういうふうに関連していくのかということが、大変難しいのでございます。そんなことになり
ますと、話がだんだん理屈ぼくなりますので、いい加減に切り上げたいと思いますが、この「縁
起」というものから、所謂「空観」といって、全てのものの本質、本性、それだけで独立し
て持っている本性というものは無いのだという、大乘仏教の基本の「空観」が出てくる。そして
この「空観」からこの世には私共の知恵の力ではつかめない、何か不思議な世界があるという諦
念ねん、そこに進んでいって、初めて信仰というものが出来て来ます。大ざっぱにいいますと、こうい
うことになろうかと、私なりに思っておるんです。いつの間にか話が大変理屈ぼくなってまいり
ましたが、こういうお話を申し上げるつもりはなかったのですが、仏教の原点を忘れているとい
う話から、ついこのようになりまして申し訳ございません。

さて元の話に戻りまして、仏事の現場ではいろいろ反省しなければならぬ事が一杯あります。その一つに、今申しましたとおり原点を忘れておる。お釈迦様の原点からこういうふうになって、今の教えになつてゐるんですよと言ふ、それにあんまり留意する人が少ないのではないかと思ひます。しかしこの事は一つの反省ということに致しまして、このことに関しましてはこれ以上やらないことにします。それから具体的に申しますと、宗派の中には、自力、他力の違いというのが、古来やかましくいわれております。自力聖道門と申しまして、悟りを開くのは己自身の努力によるのだという主旨で教えを説く。私は天台宗ですが、天台宗はそういうことではないと思ひますが、真言宗、禪宗（曹洞宗、臨済宗）、日蓮宗系統の宗派が常識的にそうと考えられていますが、一方では他力浄土門といひまして、仏様の他力によつて救われるのだと説く宗派があります。これは法然上人の浄土宗、親鸞聖人の浄土真宗、その他にもいろいろございます。このように宗派による違いということもいろいろ考えてみなければならぬ問題があります。自力聖道門の宗派で代表的な日蓮聖人という方は非常に激しい気性の方で、他の他力浄土門の宗派を非常に鋭い舌法で念仏無間というふうにいわれておりますが、このような対立関係にこだわる事自体がもう古いと言わなければなりません。

また現状で反省しなければならぬのは、経済第一主義による弊害であります。今日末端の佛教各派は外から見ますと、一応そんなふうに見えませんが、中へ一歩入りますと、とにかくお

金が第一だという、これが実情です。建前はそうではないですけど、本音は万事お金が第一だと断ぜざるを得ないということが、非常に多いのです。私、自分の反省を兼ねまして申し上げるんですけど、今から七、八年前、全く思いもかけず、ちっぽけな宗団でございまして、天台真盛宗という、末寺は四百五十位しかないんですが、その宗議会の推薦を受けまして、宗務総長にさせられました。たまたま学校も定年になりましてちよつと暇になりましたので、これからはいよいよ本職の仏教活動をしなければならんなと思っておったのですが、いざ宗務総長を引受けましてやってみますと、いろんな矛盾を感じまして、とても悩みました。そして実際宗務総長は何が一番大事でやってくれと頼まれるかといえますと、宗団の経営なんですね。〇〇が壊れたから修理しなければならぬとか、こういう法事があるとか、いろいろ調度品を作らにやならんとか、本山にあります衣帯えたいと申しまして衣だの袈裟だの、そういうのが古くなりますと新しいのに作り変えなくてはなりません。みんなお金が掛かることばかりなのです。ですから末寺からそのお金を徴収せねばなりません。

それをちやんとやるのが偉い宗務総長だということになっています。ですから仏教本来の教えについてそんなに難しく喋らねばということはないんです。となりますと、会社の経営と同じです。この中には企業体のトップでそういう事をなさった方がいっぱいいらっしゃると思いますが、それとあんまり変わりません。宗教の名を冠しておりますけども、仕事としてやっていることは

と言えば、会社で言えば専務さんなどの仕事とあんまり現実に於いては変らんことをしなければなりません。お金を集めているろんなことをしなければなりません。修理はしなければならん、人は雇わねばならん、月給は払わねばならん、ということ。表向きは無欲清浄、専勤念仏せんごんとだけを一生涯申しておればよいと、それだけでは済まないわけです。宗務総長とはそれと全々違うこと、有欲不浄でなければならぬ。欲があつて清らかでない仕事、念仏なんかはどこかへ行ってしまった、その位の仕事をやらなければならなくなり、これはたまらぬと思ひまして任期四年が来ましたらさっさと辞めました。

また本山ではなくても、それぞれの末寺へ行きますしても実情はあまり変らぬと思ひます。これは必要悪なんだろうと思ひますが、お釈迦様は欲を捨てよとおっしゃつたのに、どうなんだろう。この世界の中で、一つの寺としてやって行くとなると、これは避けられないのかも知れませんが、あまりにも本来仏教の教えから離れた俗事をやらねばならぬ。やらねばならぬところが、それをやることに明け暮れておるといふのが、一般的な実情ではないでしょうか。この矛盾の解決は大変難しいのかも分かりませんが、ともかく、こういう実情は、大きな本山であれ、小っぱけな末寺であれ、あるいは住職個人の生活であれ、実際の日常生活にあつてはこの資本主義の社会ではすべてが経済第一主義で動いていることを私は残念ながら否定することが出来ないと思ひます。

この問題つまり仏教的な悟りを実践すべきことと、日常生活での経済中心の流れとをどのように調和させていくのか、その間のバランスをどうとっていくのかということが非常に難しい問題だと思えます。私の体験した限りですと、そういう問題は面倒くさいから、戸棚の奥へしまい込みまして、もう触れない。そしてとにかく日々のことをこなすというのが、大部分の現場の僧侶方、住職方がやっている生活なんです。それに対する反省が果してあるのかという点が重大な点です。私はそのことが大いに疑問です。口ではいろいろと言っておられるかも知れませんが、偽らざる現場の一住職の告白とでもいいいますか、そのようにお聞き取り下さい。仏教の現場はそんなきれいなものではありません。残念なことですが、本山でもお寺でもその外観がきれいになるのは非常に結構な事だと思います。

ところがそれに見合うだけの精神的內容が、その中に在るのかどうかということが、大いに疑問でございます。私はその中の一人でありますから、私の言ったことには自分で責任を取ればよろしいので、そのつもりでお聞き下さるようにとお願いしますが、仏教界では大体外観と精神的內容とがあまり一致しておりません。ですから一見パツと見て、あーあ立派なお寺だというふうに皆さんそれに眩惑されませんように、一つお願いをしたいと思えます。これは非常に恥しいことなんですけど現実なんです。皆が皆とは申しませんが、その立派な構えの裏に何が隠されているかということ、勿論それは我々現場の僧侶が大切と感じて努力せねばならないことは、

申すまでもございませんが、どうぞ皆様のような有識者の方から正しく見抜いて頂きたいのです。こういう建前と本音との間の大きなギャップに対する反省が、仏教の現場では極端に申しますと不十分どころか、殆んどないというのが偽わらざる実情だろうと思います。

それから今度は、先程のお経の話に戻りたいと思いますが、一体そのお経はどういう意味ですかと、誰もお聞きにならない。そうなりますと、われわれ僧侶の方はつい、イージーゴーイングになります。ああ、これで良いならと言うことで、ワアワアとお経だけを申し、お金をもらって帰るといふことになる。その結果、現場の僧侶の資質はほとんど低下していく。昔はそうではなかったんです。ここでひとつ皆さんにお聞きしたいのです。皆さんの中には恐らく、ご自分の宗派のお仏壇をお持ちでしょうが、そういった仏教的な活動に心から賛同して、本当にその教えというものを信じておられる方が何人いらっしゃるか。まあ、昔からの事だし、仕様がないわ、信教は自由だから止めたら良いんだが、墓の問題もあるし、世間体のこともあるし、いろいろ煩いからこのままにして置こうというのが皆さん方の偽わらざるお気持ではないでしょうか。そんなことはないよ、私は心から本当に今の我が寺のやり方に、全面的に何の異議もなく信服しているよという方がいらっしゃるかどうか、私は、大変疑問に思うのです。恐らくいらっしゃらないと思うのです。こう成ったのも結局は現場の僧侶の不勉強によるのだというところですね。仏教はなくなってもいいが、必要悪というか、しょうがないから墓だけは置いてあるんだと、こ

の程度でお済ましになっているのではなからうかと思えます。

そこで私が申し上げたいのは、その現状をはっきり認識しておられる方は、こんな低次元なことは、あほらしくてまともに相手になつてられないから、坊さんに対しても良い加減にしてお布施をやって帰ってもらおうかという、そういうことが続くということが大変嘆かわしいと思うのです。それでもつて仏教に対して簡単に判断される、それが私としては、非常に残念なんです。

先程仏教音楽の例で申しましたが、今日実際にやられていることと、本来あるべきものとの間のこの落差、これは何も声明の世界、仏教音楽の世界にだけ存在するのではないのですが、現実の宗教活動やお坊さんの日常の言動や、やっていることと、本来の釈尊をはじめとして、宗教的天才の方々、開祖と言われる方々が、身を賭してやられたこととの間のこの落差、これを何とかして少しでも縮めるように努力をしないと、やがて現在の仏教は見捨てられ、滅びてしまうだろうと思われるのです。私も専門の仏教音楽以外にも仏教学というものを、私なりにいろいろ努力いたしましたして、勉強させてもらい、少しは弁えられるようになったと思うんですけども、その時に、私が痛感したことは、仏教学は非常に精密な論理で組み立てられていて、そこに使われている述語、用語が、あまりにも現代使われている思想用語とかけ離れている。一体何を言っているのかわからんということ、もっとはつきりいいますと、それらの伝統的術語を現在の思想用語に翻訳したらどうなるかという、その努力が極めて不足しているのではないかと思うのです。だか

らわれわれ素人には分からない。私はそのギャップにもものすごく悩まされたんです。とにかく難解なのです。我々がそうなんですから、まして皆さんに於かれましては、仏教の本を読んで理解されることは無理な話ではなからうかと思えるのです。

抽象的な話ではなくて、もっと具体的な話をしてみようと思います。「般若心経」といお経があります、このお経についての本が沢山出ております。それらを私は読みまして、何をふざけたことをいうているのか、人をバカにしている經典だと思いました。若い時、色即是空、空即是色、又、不空不淨、不増不減、先ず引っかけかりましたのがこれです。汚れたるにあらず、清らかにあらず、増すにあらず、減るにあらず、それでは一体何なんですか、人をバカにするにも程があると思つたものでした。色即是空、空即是色、この色といひますと、今の用語でいひますと、何も現実の色彩なのでなくて、仏教でいう色というのは、我々の感覚の中に見えてくる周囲の現象なんです。そういう自然現象下界の世界を色と言ひます。それが空だという。空っぽの空が即ち是れ色だという、この飛躍した理論、これをどう理解すべきだろうか。これを読んだ時に、一所懸念理解しようと思つたけど、どうしても出来なくて私は腹が立つたものでした。こんな人をバカにしたようなことを言つて良いのか、あれは般若經典と言ひまして、羅什や玄奘三蔵などという人々が訳した膨大なお経の中のエッセンスの經典と言われるもので、大抵の仏教信者の人たちはこれを暗記しています。ところがこの中で説かれていることは現代の我々の常識からして、

あまりにもかけ離れた飛躍的論理で述べられているのです。ところが、私は最近、ここ四、五年前からなんですけど考えが變つて来ました。それまでは勉強する気はあったんですけど、般若部經典とか、ああいう空の思想は論理として分からない、ついていけないことに気づいて勉強する気が無くなつてしまいました。ところがある機会にそうでは無いという事にハッと気が付いたのです。私は今でもその手掛りを与えられたことに感謝いたしておりますが、それはどこから来ましたかと申しますと、国内でなく外国からでした。

アメリカのバークレーという所におられた原子物理学の先生で、F・キャブラという人が本を書いております。この中にもその本を読まれた方がいらっしゃるかとも思いますが「The Tao of Physics」という本です。直訳すれば「物理の道」とでも訳するのでしょうか。このキャブラ（理論物理学者）が驚くべきことを言っているのです。私は文科系統なので、自然科学というのはあまり分かりませんが、とにかくその人の書いておられることを見えますと、アインシュタインとか、マックス・プランクとかが出て来まして、今までの古典的な物理学、ニュートンとかああいう人の理論がそのままでは通用しなくなりました。自然科学の世界にも全く新しい論理、考え方というものが必要になって来て、新しいコスモロジイが出る時代になったと言います。簡単に端折つて申しますと、そのに開けてきた新しい世界観というか、宇宙観というものが、驚くべきことに東洋の神秘的思想に近づいているということを主張しているのです。この著者は大

変勉強家のように、何も仏教だけではありません。中には老子などの道教やインドの古代哲学などにも触れていますが、仏教者のいう空の世界、空観というのは、まさしく我々の素粒子世界に当てはまる論理だということです。彼に言わしますと、Particle 素粒子というものは同時に wave 波動という全く相反する二重の性格を持っている。粒子かと問えば粒子の答を出す。波動かと言えばそれで答えるというようなこととか、観測者がどういふ観測装置でもって観察するかということによって、向こうは違う答えを出すんだとか、いろいろと驚くべきことが述べられておりまして、これはと思いました。向こうの国の物理学者の方が、私なんかよりも空の思想というものをよりの確に把握していると思つたのであります。これは、私にとってはものすごい驚きであると同時に大きな喜びでもありました。

それから私は憑かれたように、素人ですけれども手あたり次第にいろんな自然科学の本に興味を持ちました。最近では有難いことに、岩波新書だのでいろんな啓蒙的な本が出ております。このような自然科学の本の方に仏教の本よりも興味が出てまいりました。量子力学というのは、ものすごい数式を使いますが、私は数式によって理解しようという気持も能力もないのです。専門家の方々が、素人の我々にも分かるように、こうだよ、ああだよと解説されている。それを讀ませてもらって、それまで理解出来なかつた「空」の世界「縁起」というものを見直しますと、あなる程なと結論として分かつた気がするのです。

「なる程世の中は不思議なものだ」と。

ふつう自然科学と宗教とは一番かけ離れたものと思われませんが、その科学の最先端が大乗仏教の考え方というものに接近して来ているというのが事実だろうと思ひまして、最近では、そちらの方に熱を上げて私なりに研究しております。仏教で釈尊がいわれた縁起というものを、量子論とか、相対性理論とかいうものから見ても参りますと、そちらの方が昔からの伝統的な難しい仏教用語で書かれている論文よりも、はるかに分かりやすいのです。これは私の実感です。物質の存在形態について釈尊はどうしてそれが分かったのか、多分直感だろうと思ふのです。本当の天才というのは、ゼネコンではなくて本当の天の声を聞き得る能力ではなからうかと思ふのです。

普通の人知を越えた何かの暗示というか、啓示というのか、あるいは電波というのか、それをキヤッチする、そういう並はずれた能力を釈尊をはじめとして、天才と言われた龍樹、もしくは世親という、どちらもインドの人ですけど、ひらめきを捉えたのではないかと思ひますし、それが現在の物理学の最先端において次第に明らかになって来ているような気が致します。ここに、仏教というものの現代において在るべき真の姿の基本があるはずだと、私は最近になって悟った次第でございます。

時間もまいりましたのでこの辺で終わりますが、現在仏教活動の末端において行なわれていることと、その本来あるべき姿との間のこの落差、先程も音楽の時に申しましたけれど、それがあま

りにも大きいということなのです。我々はあるべき姿をつかまないといけない。それを今の言葉で皆さんにお話をして理解して貰わないといけない時代なのです。現代は今迄の古典物理学が通用していた時代ではないのです。新しいコスモロジイが生まれてくる。それから深層心理学で言われ出した暗在系と明在系からの情報を区別してキャッチすること、などがこれからの仏教者の課題である筈です。我々の感覚を通して捕えているのは、明在系からの情報ですが、その明在系でなくて、その彼方にあつて捕えられない情報源というのが、暗在系であつて、これの存在することを認めざるを得ないと心理学者は言っているのです。ここに新しい時代二十一世紀の宗教と（仏教だけではなく）科学との接点というものが開けていくはずだと私はそのように感じている。今日この頃でございます。

どの程度皆様のお気に入りましたかどうか存じませんが、取り止めのない放談をさせて頂きまして、拙いお話を終りにさせて頂きます。有難うございました。

（京都市立芸術大学名誉教授・京都薬科大学教授）